

FAERIES IN THE WORD

優鬼の森の封印石

こころ耕筈



序章 風の集う森

 彩虹房

序

章

風の集う森



序章 風の集う森

地下鉄の列車内で車掌のアナウンスがあった。

「現在、強風のためにJR線は運行が乱れています。到着しますホームは混雑が予想されます。一部運行を見合わせている区間がありますので、乗り換えのお客様は、じゅうぶんにご注意ください」

列車は乗客で混雑しているホームに滑り込むと、定位置に数センチの狂いもなく停止をした。この駅で降りかかった女性の、ポケットにある携帯電話が小刻みに震えた。

「はい、桜樹です」

「あ、姉さん、わたしよ、私」

「なんだ、美帆なの。携帯には電話しないでって言ってあるのにどうしたの」

「だって、急用なの」

「手短かにね」

女性は迷惑そうな声をだした。

いそがしく仕事に飛び回るキャリアウーマンの姉は、妹の電話を聞きながら歩を進め、改札口から地上にと続く長いエスカレーターに乗った。桜樹美貴と嶋本美帆は一卵性双生児なのだが、せっかちな姉におっとりした妹と、同じ遺伝子を持ちながら生まれ持った性格は、正反対とも思えるほどに違いがある。

「今日ね、姉さん家の方、風が強いでしょ。離れていたってどの場所の天気もネットで調べられるんだから」

「さあ、それが何か」

「夏の終わり、風の強い日、それに今日は満月よ」

「いいかげんにしてよ。あなたも暇ね。遠くロンドンからこんな電話をしてくるなんて。私は戯言を聞くほど暇じゃあなくてよ。あなたの占いなんて聞きたくもないんだから」

美貴は美帆の占い癖が苦手でもあった。

いや、もはや癖や趣味などという生易しい物ではなかった。子供の頃からそうした傾向のあった妹は、今やヨーロッパ在住の占い師だ。現地では東洋の神秘の巫女様として、けっこうな人気のような。婚期を逃した妹は、他人の色恋沙汰のアドバイザーになっていた。まったく他人のことより自分を占いなさいよ。と姉はいいたげだ。

美貴は美帆のそうした感性にまったく同調できない。妹は非科学的で自己中心的な思い込みの激しい性格だ。嫌いとはまでは言わないが、姉妹でなければ敬遠したい部類の人種だと思っている。

「姉さん。真面目に聞いてよ。気を付けてあげて」

「いったい、何を言っているの」

「夏美ちゃんのいなくなった日、おぼえている」

「あたり前じゃないの。私を怒らせたいの。娘のこと、夏美のこと一日だって忘れたことはないわ」

「その日も、今日と同じよ。夏の終わり、風の強い日、それに満月」

「どういうこと」

「三つの条件がそろったわ。もしかしたら、考えたくないけれど繰り返されるのかも知れない」

「端的に言って」

「百合ちゃん。気を付けてあげて」

「まさか、百合まで」

「そうならないよう願ってはいるけれど。私が行ってあげたいけれど、ちょっと遠くて無理。しばらくは帰国できそうもないから」

「もう、いいかげんにしてちょうだい！」

美貴は話しながら改札を抜け、駅前の繁華街の真ん中で声を荒げて通話を切った。通行人が何かと美貴を振り返った。身長のある美貴はそれだけでも目立つのに、怒鳴ったりすれば注目をあびることこのうえない。

ゴツと、突風が吹いた。

風——、美貴は思わず歩を止めた。

何よ、美帆は自分の占いを信じ込んでいるから始末に悪い。その高慢な自信が、もしかしたらほんとうなのと私まで不安にさせるじゃないの。今日は早めに仕事切りあげようかしら。と考えた。でも、美貴がどれだけ急いでも仕事が一段落して帰宅するのは、夜中の十一時過ぎにはなってしまうだろう。

「うわあ、すごおい風」

少女は思わず風の吹く空を見上げた。

公園の木々がいっせいにざわついていて。少女のさして長くはない髪の毛がなびき、衣服がばたついた。砂埃が襲って目をつむった。回りで遊んでいた子供やその親たちが、きゃあきゃあと歓声のような声でざわめいたが、風音の方が勝っていた。

早く帰った方がよさそうと、少女は足早に歩を進めた。

桜樹百合、花の名前をふたつも持つ少女は、公園で遊んでいたのではない。この公園は通り抜けると近道だからいつも、スーパーのお使いにはこの近道を通るのだ。

百合は公園を抜けて住宅街の路地に入ったが、吹き付ける風はいっこうにおさまる気配は見せなかった。百合の家は高層マンションの最上階にある。十数年前の建設にあたっては、日照権だの、見下ろされる不快感だとか、建設反対の住民運動がすごかったんだそうだ。

だから住宅地の住民とマンションの住民は、いがみあっているとまでは言わないが、未だにしっかりとわきまをきいていない。百合の通う学園の初等部でも、マンション派と住宅地派のグループ別になってしまっている。もっともいがみあいのはじまりは、百合の生まれる前の話しなのだから、百合はピンとこないしもちろん気になんかしていない。

二九階の左端、エレベーターから降りて三件目、そこが百合の家だ。お気に入りの白い格子模様の玄関ドアを開けるなり、体当たりをするかのように大きな猫が飛びついてきた。百合はスーパーの袋を置いて猫を少し重そうに抱き上げると、甘えるように猫はミャアと鳴いた。

「ただいまー、ハッピー」

ハッピーは百合が拾ってきた迷い猫である。アメリカンショートヘアの模様なのに、ずいぶんと体毛が長い。子猫の時は短かったけれど、六ヶ月を過ぎる頃からペルシャ系統の血も出てきたようだ。いや、ペルシャよりはヒマラヤンかも知れない。ハッピーは顔が黒いのだ。だから見ようによっては狸っぽくもある。洋猫の雑種なのだけれど、日本猫のようにふだんは穏やかな猫だ。ただ、百合にじゃれる様子はやはり荒っぽい。鋭い爪に引っ搔かれるのは日常である。

「ただいま、買い出しから戻ったよ。パパ」

「やあ、早かったな百合。いつもすまないな」

「なんのなんの、美味しい夕食作るからね。もっともパパには昼食だね」

百合はノッポの父親に対して友達のように話す。おまけに男の子のような口調である。それでも中身はほんとうのところは女の子らしいのだけれど。身長はクラスでは大きいほうだ。母親も身長が高いしかなりノッポの夫婦だ。だから遺伝で、百合もだんだんノッポになっていくのかも知れない。

いつも度の強い縁なし眼鏡をかけて、内職のように自宅であくせく仕事をしている父親の虹作。いわゆる在宅ワークだ。その職種は絵を描くことだ。いわゆるイラストレーターって職業である。最近は手書きではなく、パソコンのグラフィックソフトを使っての仕事が多くなってきている。だから、パソコンのディスプレイの前に釘付けの毎日だ。

でもそんなに有名ってわけではない。出版物とか新聞の折込みチラシ、カタログ等にカットといって小さな絵を描く。メ切までにほとんど時間がないのが常で、パソコンに向かって働きづくめでも奥さんよりも稼ぎが少ない。

百合は稼ぎ手の母親の変わりに夕食の支度をするのが日常である。おかげで同級生の友達のように塾通いしなくてもすむから、小さな奥様家業はさして苦にならないし、第一料理そのものが嫌いではない。とても小学五年生とは思えない手慣れた手付きで米をとぐと、炊飯器をセットした。次にマカロニを茹でだした。夕食はマカロニグラタンと、温かいご飯にシーフードミックスをまぜあわせて、レンジで加熱するお得意のシーフードチャーハンだ。

グラタンもそうだがレンジ料理が多くなるのも、母親に味の変わりにくい料理を食べてほしいからだった。職業婦人の母親は帰りが遅い。だから母親の分は調理途中で後はレンジにかけるだけにして、いつもラップをして冷蔵庫にしまっておくことにしている。

夕食は父親と百合、ペットのハッピーの二人と一匹でということになる。百合は一〇歳年上の姉がいる。いや、いたといった方がいいのかも知れない。百合は姉と過ごした期間はまったくないのだから。姉との記憶は物心付いてから見た写真やビデオの中にしかなかった。

百合の姉、夏美は百合の生まれる少し前から、行方知れずになっていた。それは家族がこの高層マンションに引っ越してきて、間もなくのことだった。警察も必死に捜索をしてくれたのだが、誘拐なのか事故に巻き込まれたのか、皆目手がかりは見つからなかった。まるで神隠しにあったかのように忽然と消えたのだった。

姉がいれば百合の家族の食卓もにぎやかになっていただろう。料理も姉妹で楽しく作れただろう。百合にはそれが辛かった。

食事の後かたづけも終え、百合は自分の部屋から出られるバルコニーに出た。

高層マンションだから用心のために手摺りは高いし、ペットや子供が落ちないようにと冊の間隔も狭く作られている。そのバルコニーを牛耳っている大きな鉢植えがある。その緑に水をあげるのも百合の役目だ。ジョウロを手にしてしている百合の足下に、ハッピーがまとわりついてきた。

百合はハッピーの喉を撫でながら空を見上げた。

雲のない宙には星々が瞬きだしている。上空の風が強いと星は瞬くものだ。地上もあいかわらず強い風だ。高層マンションの上層階では、風音も地上よりも強い。ゴウゴウと波打つ風の音が、まるで生き物の声のようだ。野獣の咆吼に似たうなりの中に、乙女のような甲高い叫びに酷似した音が混ざっている。百合が見下ろすのは、いつもの見飽きた住宅地の景色だ。その中を勢いよく吹き抜ける風は、毎年この地域、この時期に、夏の終わりを告げるかのように吹く風だ。

あれ——？

百合は目をこすった。

風の吹く先に大きな森が見えたのだ。見渡すかぎりの住宅地、遠く四方向に高層建築がひとつずつ、さらに遠くに都心が見えるだけのはずだった。このマンションを含めて五つの高層建築、そのちょうど中央のあたりだ。あんな場所にあるはずもない森が見えた気がした。でも、もう一度目を凝らすともうその森は見えなかった。気のせいだったのだろうか、幻だったとしか思えない。蜃気楼でも見えたのかしらと百合は思ったが、さして気に止めなかった。それよりも足下にまとわりつくハッピーが突然うなったのに驚いた。

「どうしたのハッピー」

毛を逆立てて、見えない敵がそばにいるかのように凶暴な目付きで、シャーと、猫独特の威嚇の行為をしていた。

「なんなの。何もいないよ。私に怒ってんの？ でもないよね。風強いよ。飛ばされちゃうぞ。部屋の中に入ろう、ね、ハッピー」

部屋に入ったハッピーはいつもの甘え猫に戻ったようだ。脚にじゃれつくハッピーをよそに百合は机に向かった。母親の帰りはまだまだ先になる。その間、お決まりの宿題をかたづけねばならない。新学期がはじまったばかりなのに、もう宿題の山だ。でも量はあっても百合にとってはさしてむづかしい宿題ではなかった。幸い、百合は猛勉強をしなくてもクラスで上位の成績をキープできている。

その日は深夜まで風が吹き続けた。

この奇妙な風は、あやつられるかのように一点に集中して行く。まるで竜巻に吸い寄せられているかのように、街路樹や公園の木々を大きく揺らし、電線や電話線を低くうならせながら、風は一点に、一点にと集まって行った。

風を受けた緑の葉が、自らの意志であるかのようにざわついている。

ここは風の集う森。

月明かりに浮かぶ森は、うっそうとした濃い緑だ。ここを見ると自然は調和がとれて美しいなんていうのは間違いなのだと気づかせてくれる。この森の緑。誰一人手を付けたことのない深い森、そこに自生する樹木の枝を探してみると、なんとも長くねじれた奇形の枝なのだろうかと

思う。

枝は光りを求めて、ほの暗い中奥からうねりながら触手のように表面に出ようともがく。そんな枝が何百何千と絡まりながら、互いを押しのけへし分けてようやく表層へと躍り出ることができ。躍り出た勝者の枝葉だけが太陽の恵み、光りの恩恵にあずかれるのだ。

この幸せな緑の枝葉の奥には、光りには届くことなく力つき朽ち果てた枝が、枯れた屍をさらしている。こいつはまるで海に溺れる亡者たちのようだ。海面に躍り出ようと他人をかき分けて、己だけが助かろうともがく怨霊の手のように映る。

自然の掟は強くなければならない。強者生存のみが唯一の真理だと、このうっそうとした森は教えているかのようであった。

これが命あふれる大自然って奴の正体なのだ。この、あやかしの森には地の果て、恐ろしき異界を封じている要石としての役割がある。しかし、都会に隣接する住宅街の中であって、この森に気を配る人間はとんといない。まるでこの木々が、うっそうとした緑が見えていないかのよう。

そう——実際、見えていないのだった。

不可解なるかな——摩訶不思議なること。

あるのに見えない。

あるのに触れられない。

それがこの森があやかしたる所以なのだ。しかし、しかしだよ。なんのきまぐれか、ごく一部の者だけがこの森を見ることが許されることがある。それは、このあやかしの森が招いているからとも言えなくもないだろう。

あやかしの森に集い来る風は、濃い霧のようになってその流れが目にも確認できるようになった。その幾本もの流れの筋はひとつの大きな大きな影に集まって行った。

この風はあやかしの呼吸なのか、その鼻の恐ろしく長いことったらない。まるで大蛇のようなそれに、黒い霧のような風は吸い込まれて行った。それに従いあやかしの腹部は大きく膨らんでいく。爛々と輝く大きな赤い一つ目のそいつは、苦しげにすさまじい声で吠えたと、その長い牙のある口から、大小の固まりが五つ勢いよく飛び出した。

この固まりはとてつもなく臭く、ドロドロとした溶岩のようでもあったが、まだら色の大きな卵みたいで殻がなく腐った中身のように見えた。

奇妙なる物体は空中に静止していたが、ゆっくりと森の上まで浮かび上がった。怪しい光りを発しながらクルクルと空中を回転してから、猛然と勢いをまして五方向に散って行った。この現象を見届けたかのように、あやかしの森のあちらこちらから声が起こった。オオオーッと、地の底からわき上がるかのような歓声であった。

優鬼の森の封印石 序章 風の集う森

<http://p.booklog.jp/book/73867>

著者：こころ 耕筈 彩虹房

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/saikoubou0/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73867>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73867>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

